



# 性的問題行動を示す発達障害の青少年と保護者向け ySOTSEC-ID 支援—発達支援と臨床的プログラムの開発—

## 1. 研究の目的

(1) 「ySOTSEC-ID “Keep Safe”」日本版マニュアルのストーリー・教材の妥当性の検討

①本研究は、性的問題行動を示す知的障害・発達障害のある青年期の人々に対する効果的な発達の・臨床的支援方法を研究することを目的とし、イギリスで開発された「性的問題行動（HSB）」を示す知的障害・発達障害のある青少年と保護者向けのグループ治療プログラム ySOTSEC-ID “Keep Safe”」に注目した。

ySOTSEC-ID “Keep Safe”（以下、“Keep Safe”とする）とは、有害な性行動（HSB）をとる知的障害のある青少年（CYP）の現場に関わる実践者と研究者が開発したものである。成人向けの支援の中で対象者の相当数とその不適切な性行動や性犯罪行為が青少年期に始まっていることに気づき、思春期・青年期への発達の支援や臨床的アプローチが必要であることが指摘されており、青少年への対応の重要性が指摘されているにも関わらず、彼等に対するサービスはわずかであり、調査研究も少ない。

②そこで筆者らは、“Keep Safe”Project 代表のロウィーナ・ロシター博士 (Rowena Rossiter) と連携して資料を整え共同研究を行うこととした。日本においても活用できる「性的問題行動を示す知的障害・発達障害のある青少年とその保護者への支援プログラム」日本版マニュアルを検討し、日本に合わせたプログラム内容の編集や適切な教材の作成を行うこととした。

(2) “Keep Safe”日本版のストーリー・教材の妥当性の検討

① “Keep Safe”日本版の妥当性を検討するために、ストーリー・教材の妥当性の検討を行うこととした。モデル実践を実施し、対象者の障害特性、リスクアセスメント、触法・非行分析に合わせて、使用するストーリーと教材を複数作成し、適宜、適用して妥当性を検討した。

## 2. 研究の計画

(1) “Keep Safe”日本版マニュアルのストーリー・教材の妥当性の検討

① “Keep Safe”イギリス版マニュアルの翻訳研究協力チーム12名を編成し（研究者の他、少年院教官、特別支援学校教員、弁護士、児童相談所心理士など）、和訳とともにマニュアルに使用される認知行動療法に関するストーリー・教材が知的障害・発達障害のある人向けに妥当であるか、視覚的教材が日本においても妥当であるか検討を行うこととした。

(2) “Keep Safe”日本版のモデル実践とストーリー・教材の妥当性の検討

① “Keep Safe”日本版マニュアルのプログラム効果を測定するために、A地区およびB地区、C地区の3地区においてモデル実践を行い、ストーリー・教材の妥当性の検討を行った。プログラム本体は週1回～隔週1回、2時間、全23回～38回セッションであった。

②事前にリスクアセスメント、知的能力、自閉スペクトラム症の特徴把握、環境状況のアセスメント等を行った。対象者は、知的障害・発達障害のある9人の青年であった。年齢は12歳～40歳代、知的能力はIQ50台～80台、9人とも自閉スペクトラム症の特徴を有し、1人はADHD特徴が顕著であった。9人はほぼ全セッションに参加した。

## 3. 研究の成果

(1) “Keep Safe”日本版マニュアルの作成とストーリー・教材の妥当性の検討

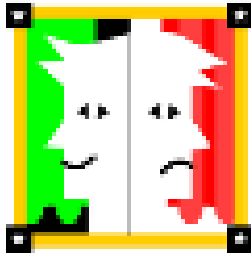
知的障害・発達障害のある青少年とその家族に向けた“Keep Safe”の日本版マニュアルのうち、対象者に合わせたストーリー・教材の妥当性の検討をした。

① “Keep Safe”日本版マニュアルの目的は次の2つに焦点を当てた。

A；ウェルビーイングの向上（ニーズを、社会に適応した方法で満たす）

B；再犯に至るリスクの低下（ニーズを、性加害や他の不適切な方法で満たさない）

② “Keep Safe”日本版マニュアルのモジュール構成（当事者6モジュール38セッション、保護者モジュール7：16セッション）と主要教材は2019年度に作成した日本の思春期・青年期の当事者に合わせたイラストやアニメも合わせて、複数のストーリーやイラストなどの視覚教材を作成した。対象者にあわせて妥当性を検討した。



## (2) “Keep Safe” 日本版のモデル実践とストーリー・教材の妥当性の検討

① “Keep Safe” 日本版のプログラム内容のストーリー・教材の妥当性を検討するために、全国の3か所でモデル実践を行った。その際、知的障害・発達障害のある思春期青年期の当事者に合わせ、理解しやすいような視覚的教材や演習方法などを導入し、より効果的な認知行動療法になるようプログラムを改良した。

A地区グループは児童相談所と知的障害児支援施設が把握する性問題行動を有する当事者4人、B地区グループは発達障害者支援センターがコアになって把握していた性問題行動を有する当事者3人が対象であった。C地区グループは市基幹相談支援センターと地域生活定着支援センター、相談支援事業所のスタッフがチームを組んで実施した。生活年齢は12歳～40歳代、知的能力はほぼ軽度であり、認知行動療法が求める情報の共有やコミュニケーションを取ることが可能であった。リスクアセスメントはARMIDILO-S (The Assessment of Risk and Manageability for Individuals with Developmental and Intellectual Limitations who Offend Sexually) により行った。

② “Keep Safe” プログラム実践と対象者に合わせたストーリー・教材の妥当性の検討の検討

“Keep Safe” プログラム実践において、どのような対象者に対し、どのようなストーリー及び教材が妥当であるかを検討した。対象者の知的能力、生育歴、トラブル事例、リスクアセスメント等に合わせ、複数の教材を準備した。対象者に合わせて使い分けることが有効であり、その基本的なルールも作成した。

## 4. 研究の反省・考察

(1) “Keep Safe” 日本版マニュアル視覚的教材の検討および正規インストラクター養成実施

① “Keep Safe” 日本版マニュアルの作成とストーリー・教材の妥当性の検討は、おおむね目的に達した。知的障害・発達障害のある思春期青年期の当事者に合わせ、理解しやすいような視覚的教材や演習方法などを導入し、より効果的な認知行動療法になるよう改良した。

② 日本語版マニュアルの検討と同時に、“Keep Safe” セッションを実施するインストラクター養成を行った。理論的研修を2日間、オンライン研修にて行い、その後1日間対面演習において、各セッションの模擬演習を含めて実施方法の実務研修を行った。全国2か所で順調に実施でき、全国で100人の正規インストラクターが養成された。

(2) “Keep Safe” 日本版のモデル実践と効果測定

① 今回、“Keep Safe” 日本版のプログラム内容の妥当性を検証するために、全国の3か所でモデル実践を行った。A地区、B地区、C地区とも毎週1回～隔週1回、2時間行った。プログラム構成や実施方法の一定の安定性を確認することができた。今回、本プログラム全セッション38回をC地区で行ったことにより、知的障害・発達障害のある性問題行動や性加害行為を起こした本人たちへのプログラムとして総合的に妥当であることが確認できた。

## 5. 研究発表

(1) 学会誌等

なし

(2) 口頭発表

① 堀江まゆみ (2021) 性的問題行動を示す知的障害・発達障害の青少年と保護者向け KeepSafe プログラム. 自閉スペクトラム症と性加害を考えるー予防と再教育におけるソーシャルストーリーTMの可能性ー、自閉スペクトラム学会、自主シンポジウム

(3) 出版物  
なし